西沢地区「病送り」講（2020.1.21）

1.はじめに・・・・

「今年１年の無病息災を祈願」し、毎年１月２１日に元屋敷（長倉、明戸を除く）、綱取、田代集落を区域として行う小正月行事であり、以前は角川各地で行われていたが、今も継承されているのが西沢地区３集落である。

講の中心行事は、「わら人形（づくり）」と「数珠回し（全員病送り。通称「ドンドコ・ドンドコ行事」）」であるが、以前は各家庭で１体のわら人形を作ったほかに、集落毎にわら６把束を各戸が持ち寄り、共同して大きく頑丈なものも作った。人形が出来上がったら、当年の「宿」（当番世帯）の座敷に集まり、車座になって太鼓と鐘を合わせて「数珠回し」を行い、その後に制作現場の家庭（稲わら持込先）を出発地として人形を持ち歩きながら集落内を回り、最後にその人形を川に流して講は終りを見ることになっていた。

病送りの起原は定かでないが、数珠回しに使われる太鼓には「明治２９（１８９５）年1月２１日」と書き記されており、少なくとも１２５年は続いていることになる。また、１００回数珠を回すことで百万遍の勘定として無病息災を祈る、という百万遍念仏の民俗信仰が国内（秋田県など）に残されているとされることも関係しているのではなかろうか。

冬期間、雪に閉ざされ外部と隔絶される住民、特に婦人層にあっては、朝６時から夕方までの長丁場ながら、一重のご馳走を持ち寄り、顔見知りの間柄で和気あいあいと懇親できる場もあった病送り行事は、楽しみな一大行事であっていたのではないか、と若かりし時期に当時を知る住民は語っている。

時を経て、生活環境の変化というか、意識の多様化というか、いつの間にか各家庭での人形づくりは行われなくなり、世帯や人口の減だけでなく高齢化及び仕事の都合などにより参加者数が減ったことから、今は人形づくりも数珠回しも３集落合同により西沢防雪センターで行われており、川流しも角川下流住民からの苦情（“川に引っかかることもあり、気持ち悪いし縁起も良くない・・・”）もあって、２０年ほど前からは河川敷土手（田代集落から越境しないこと）で焼却している。

しかし、旧態回復など困難だし、益々先細りになるかもと感じていても、出来る限り“病送り講”を続けていきたいと地域の皆さんは語る。これは、永年続いてきた行事を自分の時で途絶えさせたくない、ということもあるが、行事を通して住民の繋がりと地域が守られてきたことが裏打ちとしてあるではないか。

次の代、次の次の代に引き継いでいけるかについては、どの伝統行事も同じであるが、その手立てを見つけるのは難しいのが実情である。

2.当日の主な行程

①不動院（長倉）祈祷・御札拝受　→　②わら人形制作　→　③数珠回し　→　④儀　礼　→　⑤わら人形送出し→
⑥わら人形焼き　→　※直会（懇親）

西沢地区”病送り講”の手順（2020.1.21）

1.御祈祷と御札の拝受

朝9時までに参拝代表者が不動院に赴き、祈祷を受けた後、御札（無病息災など）と供えた御神酒を受け取る。

2.人形のパーツ

笠、角、刀、手足と男根などは事前に準備されていたが手足の指と胴体、巻きつける縄は別に用意した稲わらで当日、拵える。

3.わら人形づくり

わら人形は、当日の参加者皆んなで作り、仕上げることになっている。

5.数珠回し

数珠の長さは円周で約16mにも及ぶとのこと。参集人数に応じて一重か二重になる。数珠の親玉（中に観音様が祀られていると言われている）が来ると持ち上げ拝礼し、回す時は特段、何も唱えない。数珠が一回りすると鐘が鳴り、鳴った回数を記録し100回で終了。
太鼓のリズムはドン・ドコ・ドン・ドコの繰り返し。

4.わら人形と数珠回し

わら人形は強く丈夫でないと病払いできないとの思いで”侍”をイメージしているとのこと。
顔は、紙に黒一色手書きで強面を強調していたが、赤（口紅）を使うと趣きが違うかもしれない。
胴の表裏には不動院の御札が貼られている。
数珠回しの3点セット（数珠、太鼓そして鐘）

6.儀　礼

人形や祭壇に拝礼。持ち寄り供物（料理）や御神酒などを全員で飲食し、健康祈願する。

塩梅良く塩味が効いた甘酒が絶妙で、本当に美味かった。

7.人形送り

人形に賽銭を結び付け、太鼓と鐘を鳴らしながら参加者全員で見送りする。
（以前はとろろ飯も背負わせたが、侍に食糧と路銀を持たせ、病魔を遠くまで運んでもらう意味合いがあったという。）
送人は、当番世帯（不動院代参者）が当り、他の参加者は玄関まで見送る。鐘や太鼓は車に乗せるまで打ち鳴らす。

8.人形焼却

送人が河川敷土手で完全に燃え尽きるまで届けて、病送り行事は終わることになる。
引き続き、送人も混ざってセンターで懇親（直会）する。